

隠岐の島紀行

未踏の地探訪に心弾ませて

学生時代、熱心に参加していた安保闘争デモで“敗れた”私の前に現れたのが、当時の弓術部の仲間二人と出かけた「北海道・東北貧乏旅行」を皮切りとした旅行と山行でした。「お金は借りることができるが時間は借りることができない」という思いのもとに、アルバイトを重ねては“軍資金”を稼いで旅行と山行に出かけ、“自由な時間の過ごし方”を楽しんでいました。就職先を選定するにしても JTB(当時は「日本交通公社」)を第一志望としていたのですが、これは弓術部の先輩の長田(旧姓・鳥山)美棋子さんから「自分の趣味と就職先をごっちゃに考えるのはどうかしら。旅行の方は生涯の趣味として楽しみ続けた方がいいと思うわ。」と優しく説得されて、東芝(1984 年までは東京芝浦電気株式会社)の門を叩くことになったわけです。そんな自称旅行家の私が訪れそこなっていたのが島根と鳥取の両県だったのです。ですから今回の隠岐の島行きの話は、未踏の地を踏む“渡りに船”の話となりました。

“飛び切り”の時間の経済

しかし今回は“渡りに船”ではなくて空便で渡りました。若い頃は「時間は借りることができない」だったのですが今や「無為と思われる長い時間をとる元気がない」に変わっているからです。実際に、東京駅から新幹線(岡山まで)、特急(米子まで)を計 6 時間乗り継いでから、接続バスで 40 分かけて島根半島先端にある境港まで 40 分かけて行った上で、高速船(1 時間)またはフェリー(2 時間～2 時間 30 分)で臨まなければならないところ、羽田空港から伊丹空港まで 1 時間、更にそこから隠岐世界ジオパーク空港まで 1 時間の計 2 時間で行くことができるのですから、“飛び切り”の時間の経済となるわけです。

「絶海の孤島」にあらざりき！

先ずは、島根県沖に横たわる「絶海の孤島」だとばかり思っていた隠岐島が実は右の図のような「隠岐諸島」だと分かったのが驚きでした。隠岐諸島は島後水道を境に島前(どうぜん)と島後(どうご)に分けられていて、島前は「島前三島」と呼ばれる知夫里島(知夫村)、中ノ島(海士町)、西ノ島(西ノ島町)から構成される群島ですが、島後は 1 島(隠岐の島町)のみ。そして、主な島はこれら 4 島ですが、付属の小島は約 180 を数えるのだとか。また同諸島は、約 500 万年前に活動した火山で、そのうちの島前火山は、西ノ島の最高峰である焼火山(たくひやま)(標高 451.7 メートル)を中央火口丘とするカルデラをなしているのだそうです。



覆された隠岐の島のイメージ

そう言われてみると、島前は外輪山が中央火口丘を囲んだ形状をしていますね。実際に焼火山の山頂から眺望すると、同じくカルデラ内にできたという箱根の芦ノ湖を大きくしたような様子で、穏やかな表情で穏やかに水を湛えている姿を見ることができました。これも見事な自然景観ではあるのですが、「波浪逆巻く絶海の孤島」とばかり思っていた私の隠岐の島イメージは完璧に覆されてしまいました。



自然のアートとも言える奇岩や怪礁も連なって

一方海岸には、257m の高さで垂直にそそり立つ摩天崖(西ノ島国賀海岸・左の写真)、高さが約 20m で屹立していて夕陽が島の先端にかかるまさにその瞬間、ローソクに陽が灯ったように輝くローソク島(隠岐の島・中央の写真)や、長い年月かけて荒々しく削り取られた岩肌をもつ赤壁(知夫里島・右の写真)など、かつて火山島だったことがはっきりとかがえる高低の起伏が激しい、自然のアートとも言える奇岩や怪礁が連なっています。



“北方二島”の隠岐と壱岐

島前三島に対して島後は「沖の島」と呼ばれていて、島前、島後の四つの島の総称として、主島である沖の島の名をとって「オキの島」と呼称されるようになったという説があります。しかし、どうして「オキ」に「隠」「岐」という難しい漢字が当てられるようになったのかは定かではありません。以前に行ったことがある壱岐の島でも、古代より朝鮮との関わりが深かったと聴きました。韓国語でも、隠岐の島は「オキシム」で壱岐の島は「イキシム」です。直線距離にすると 400 キロほど離れて並んでいる“北方二島”の隠岐と壱岐。ひょっとすると、「沖」と「行き」という日本人でなくては意味が分かり難い漢字に代えて「隠」と「壱」、それに同じ「岐」という漢字を当てて中国や朝鮮の人々に分かりやすくしたのかもしれないですね。いずれにしても、「隠岐」などという読み難い漢字地名がごく自然に採り入れられているというところに、隠岐の島民の皆さんのさりげない文化水準の高さが秘められているように思います。

隠岐には神社がやたらと多い

この文化水準の高さというのが、隠岐に神社がやたらと多いというところにも表れているように思えます。江戸時代には 300 社あったという記録があるそうですが、ガイドさんから手渡された「神社マップ」にも、島前の海士町 16 社、西の島町 15 社、知夫村 7 社の計 38 社、島後の隠岐の島町 68 社、総計 106 社の“観光の対象ともなる神社”がリストアップされています。特に格式の高い名神大社だけでも、由良比女神社、宇受加命神社、水若酢神社、伊勢命神社(ゆらひめ・うづかみこと・みずわかす・いせみこと)の 4 社ありますが、島根県内の名神大社は、隠岐以外には出雲大社(出雲市)と熊野大社(松江市)の 2 社があるだけです。一般的には、神社は氏子の地域を守っている存在ですが、隠岐の古代人はもっと切実な思いで、神様にこの島を守ってもらおうと神様を祀ったのではないかと思います。そしてここにも、「隠岐が大陸からの玄関口だったから」という事情が絡んでいるようです。朝鮮半島から船出すると、対馬海流の影響で最初に漂着するのは隠岐の確率が高くなります。そのせいか古代から隠岐には、大陸からの文物が入ってきました。その一方、日本が攻撃された場合にも真っ先に隠岐が攻められる可能性が高くなります。それだけ、この島を神様に守ってもらおうという気持ちが強くなったと思われるのですが、一方で多数の神社を建設し運営するに足る経済力をこの島が持ち合わせていたというのも確かなことだと思います。

流罪の地としての条件を具備していた隠岐の島

また、後鳥羽上皇、後醍醐天皇や、小野妹子の子孫で漢詩や和歌など文学の素養にあふれた小野篁(たかむら)が隠岐に島流しされたということは社会科の教科書にも書かれていたような気がします。しかし、ここ隠岐に来て、

島流しする方にも相当な配慮が必要なのだということが分かったような気がしました。なにより、高貴の人を島流しにするのですから、命に関わるような危険や不自由のある島は選べません。隠岐には次のような理由があるから、特に身分の高い人の流罪の地に選ばれたものと思われます。

- ・本土から約 50km も離れているので、たやすく戻ることはできない。
- ・対馬暖流の影響で、冬も意外と過ごしやすい。
- ・大陸文化の玄関口だから文化度も高い。
- ・離島なのに湧き水があって稲作もできる。

その上、隠岐の島の人々にも流刑人たちを排除することなく進んで受け入れた跡が見えます。特に後鳥羽上皇などは、御祭神として隠岐神社が建立されたことから、島の人々に慕われていたことがうかがえます。また、日本最古の歴史を持つと言われる隠岐牛突きも、海士島に配流された後鳥羽上皇が子牛が角を突き合わせている姿を見て喜んでいたというところから始まったと伝えられています。

豊かな植生環境を育んだ暖流の対馬暖流

また、隠岐では様々な環境で別々に見られる種類の植物が一緒に見られる不思議な植生をしていると言われています。大陸からの冷たい北西風が上空にある日本海に、南から温度の高い暖流の対馬暖流が流れ込み、蒸発した空気が雲になることで、隠岐を含む日本海側にたくさんの雨や雪や霧がもたらされます。海洋性の気候で、冬の寒さと夏の暑さが控えめで、年中通じて雨が降り、湿度も高いという隠岐の気候は、様々な植物にとって生育に適していたというわけですね。隠岐群島が「無数の巨木が立ち並び、北方系と南方系の植物が同じ場所に分布する世界的にも不思議な島々」と言われているなんてことも初耳でした。町の面積(242.91 km²)の約 80%を森林が占め、豊かな水にも恵まれているところから、古来農業・林業・畜産業が盛んだった模様です。

日本有数の漁場でもあって「衣食足りて礼節を知る」という風土が

日本海に囲まれた隠岐諸島の沖合では、暖流の対馬海流と寒流のリマン海流がぶつかり合っていて、日本有数の漁場が形成されているために、漁獲される魚種も暖流系と寒流系と様々かつ豊富です。人口 18,779 人の島民の皆さんは、四季折々旬の魚介類を食卓に載せながら生活を営み続けてこられたことでしょう。島根県立の隠岐水産高校も隠岐の島町にあって、かつては大相撲の隠岐の島関も航海士になるためにここで勉強していたようです。農業と水産業のお陰で「衣食足りて礼節を知る」という風土が出来上がっていたからこそ古くから島民の皆さんに豊かな心が備わり、それがなにがしか“文化水準の高さ”というイメージに繋がっているものと思われます。

そんなわけで隠岐の島名物料理にも、イカ、隠岐松葉ガニ、サザエ、白バイ貝などが食材としてひっきりなしに登場してきます。私は、「クロマグロ 200kg が回遊する隠岐」を記念に「マグロの目玉料理」を注文しました。いやはやマグロの目玉のでかいこと。まさに「大目玉を食らう」の図式のようなのですが、「食味はどうだった？」と問われても、「ちょっと不気味な感じがしたけど結構おいしかった・・・そうですよ」と答えるしかありません。どんなにインターネット・サーフィンしまくっても、食感がじかに伝わってくるような記事が見当たりません。残念ですね、最後に来てバーチャル紀行文で通せなくなって。「ユネスコ世界ジオパーク」に認定されている隠岐諸島の「自然」と「歴史」、「人々の営み」に免じて、よろしく大目に見てやってくださいますように。



(完)